

短期大学初のコーオペ教育が始動 長期企業実習前の事前授業の組み立て、提携企業との 連携及び企業実習に関して

神殿織江

First Cooperative Education Program at Two-Year College in Japan Launched
Establishment of Content of Classes to Prepare for Long-Term Internship,
Collaboration with Alliance Companies, Internship Report

Orie KODONO

Abstract

In April 2021, our college started a new course called “Work Integrated Learning and Career Development Course.” This is the first cooperative education program at a two-year college in Japan. In an article in issue number 63 of this journal, I looked at the start of cooperative education in America about 100 years ago, its definition, its effectiveness, a case study in Japan, and the curriculum and targets of cooperative education at our college. In this continuation of issue number 63, I report on the establishment of the content of classes in the first semester of year 1, the educational basics aimed for, collaboration with alliance companies, the content of the internship taking place in the second semester of year 1, feedback from the companies, and student progress through the internship. In addition, in order to gather data to clarify the degree to which students have progressed through the cooperative education program, student assessments were carried out before and after the internship.

Keywords: Cooperative education コーオペ教育, career キャリア,
industry-academia collaboration 産学連携, long-term internship 長期企業実習

1. はじめに

大阪夕陽丘学園短期大学では、今年度4月から産学連携キャリア創造コースがスタートした。このコースは、学生、企業、大学が密接に関わるコースで、学内での学修と長期の企業実習が融合したコーオペ教育 (Cooperative education) を軸とする実践的

なコースとなる。本学紀要第63号⁽¹⁾で本コースの準備およびコーオペ教育に関して説明しているように、短期大学 (以下、短大とする) の2年間の内、1年を学内での学修及び事前・事後学修、あとの1年を複数の企業において長期実習に行く。それによって学生は知識と経験を積み、能力の向上だけでなく、自分の

キャリアの方向性、働く上で自分の価値観を考えることができる。アメリカで100年の歴史を持つコーオペ教育は、その効果(図1)から拡大していき、現在、北米・欧州を中心に大学院、大学において浸透している⁽²⁾。

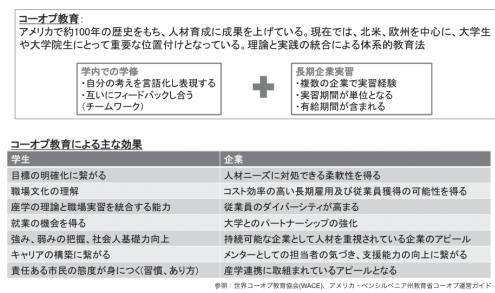


図1. コーオペ教育とその主な効果

「コーオペ教育による主な効果」は、世界コーオペ教育協会(WACE)、アメリカ・ペンシルベニア州教育省コーオペ運営ガイドを基に作成

本学では、これを短大向けに組み換え今年度4月にスタートした。(図2)

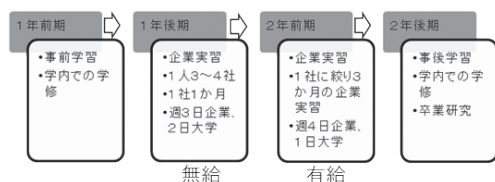


図2. 2年間の流れ

短大では日本で初めてコーオペ教育を取り入れたコースとなるが、これは、実際の経験に基づいたカリキュラムとなっている。東田(現：本学学長)がアメリカでの研究を基に、京都産業大学でコーオペ教育を実践⁽³⁾し、その多大な経験から短大2年間のプログラムに組み換え、1年前期で事前学習、1年後期・2年前期で複数の企業で長期実習、2年後期では学内での事後学習を行うプログラムとした。コーオペ教育は、企業実習が単位となることと、有給期間(本学では2年前期)が大きな特徴となり、給料をもらって仕事をする

責任感も育む。

東田は、日本型コーオペ教育の支柱として「自己と学問の関わり」「自己と社会の関わり」を重視している。学内の学修と企業実習によって、自分の興味へと動機付ける体系である。

図3は、東田が提唱するコーオペ教育の学習スパイラルモデルである。学生は持っている能力を使い、観察・失敗・工夫をすることで、それらが経験知となり、得た経験を言語化する(インターンシップノート(以下、ISノート)、報告書や伝える力)。様々な出来事に向き合い(失敗、軋轢、やり抜く喜び)ながら、こういった体験を複合的に連続的に体験することで、自己と社会への関心も涵養されていく。また、タイムリーな指導をすることで、自己効力感を生み出し学生の主体的な学修にドライブをかけていく流れである。自分で考え選択肢を用意し自分で決定し行動する力をつけていく。

コーオペ教育の学習スパイラルモデルと成長のストーリー

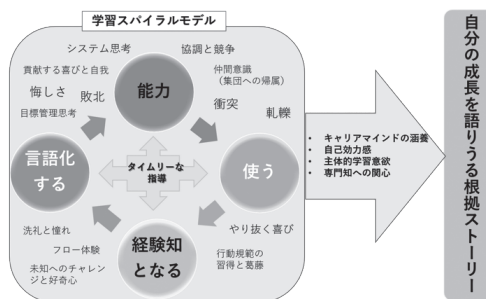


図3. コーオペ教育の学習スパイラルモデル
京都産業大学コーオペ教育研究開発センターのパンフレットから一部修正

本稿では、東田の経験に基づき、短大でコーオペ教育を導入した本コースの授業での取組から2社目の11月の企業実習まで、授業内容、学生の成長および企業との連携に関して報告する。

2. 1年前期の事前授業

1年後期からの企業実習に向け、ゼミで目標としたことは、高校を卒業したばかりの学生に、まずは基礎的な力をつけて欲しいと思いい①与えられた環境下で、指示待ちでなく、

他者と協力して自ら動ける力、②目標設定し、達成のために自主的に行動できる力、③自分の考えを公表できる力の3つに注力した。

本コースの学生は、「自分の可能性を試したい」「チャレンジしたい」「自分の興味を探

表 1. 授業内のプロジェクトおよび講座

	4～5月	6月	6月中旬～7月後半	7月後半	7月最終週
テーマ	提携企業の企業研究	社会で求められる能力	提携企業の担当の方に来学頂き企業説明を実施して頂く	産学連携キャリア創造コースの紹介プレゼンテーション	エクセル講座
	グループ別 1グループ3社調査	グループ別	1日1社～2社	全員で	希望者
内容	<p>・企業実習前に提携企業に関する知識を得ること。</p> <p>・企業を調べることが知識を深め、自分の働く上での価値観を考えることに繋がる。</p> <p>グループで複数企業を調べ全体発表を行い、全員の知識の共有を図った。企業研究の視点（企業概要、売上、持続可能性、社会貢献など）を授業で解説後、学生はグループで協力して調査、情報の統合を行い、発表。全員からフィードバックを得る。</p>	<p>社会人基礎力、社会で求められる力など、グループでテーマを決め、調査、インタビューし、その力をどのようにつけていくかをグループごとに発表。</p>	<p>・提携企業には学生の企業研究PPTを事前に送付。</p> <p>・各企業の担当の方が来学される前に、企業研究PPTを全員で再度見直し、企業への質問事項を出し合う。</p> <p>・本学の客員准教授からマナーの講座を開催してもらう。</p> <p>・マナーを身につける為、また、学生の自主性を育むため、学生には担当を決め、企業の担当の方を正門までお出迎えし、教室まで誘導を行ってもらう。</p> <p>企業説明後の質問タイムには、学生が司会を務める。</p>	<p>授業外であるが、オープンキャンパスで高校生向けにコース紹介。</p> <p>全て自分達で内容を考え全員が作業及び発表に関わる。</p>	<p>授業外であるが、企業実習でPCを使用する場面で困らないように、1年前期の情報の授業の復習を行った。操作をしっかりと理解しておくことで実習先で自信を持って取り組める。</p>
成果	<p>グループで協力・協調、積極的行動、情報共有することの困難さを身を以て体験できた。</p> <p>企業への理解が深まり、他グループの発表から新たな視点を得ることに繋がった。</p>	<p>1年前期の短期間で意識すべきことや、社会で必要な力は基本的なことが大事であることが理解できた（メモを取る、報連相、挨拶、積極的に自分から動く、コミュニケーションなど）。</p>	<p>グループで企業研究をしたことにより、一定の知識をつけることができていた。質問を考える際、その質問の意図を意識し深い質問ができるようになってきた。マナーも徐々に身につけてきている。初めて企業の方と接する機会であったため、非常に緊張がみられたが、出迎え、質問、司会を担うことで、自信となった。発表が苦手であった学生も苦手意識が軽減している。</p>	<p>コーオプ教育をベースにした産学連携キャリア創造コースをいかに高校生にわかりやすく説明するかを全員で考え、役割担当しPPTを作成できた。それにより、自分達も理解が深まった。実際の発表も非常にわかりやすくPPTも良い出来であった。前期のグループワークの成果が表れていた。</p>	<p>通常業務に必要なとされるエクセル操作はできるようになった。</p>
課題	<p>発表やPPTが苦手で、どのように構成してよいかわからない。自主的に動けない学生もいる。他者から学ぶこと、何度も経験することを伝え励ましを行う。</p>	<p>グループ間の差があり、しっかり調査しているグループとそうでないグループがあり、動機付けが課題となる。</p>	<p>全員でのディスカッションや役割決めでは、率先して手を挙げる学生とそうでない学生はいる。</p>	<p>特になし</p>	<p>特になし</p>

りたい」「実習から内定に繋がれば良い」といった漠然とした目標を持って入学してきた学生が殆どであった。学生のモチベーションを上げるため、常にワークにおける目的・目標を設定させ目的意識を育成するとともに、授業で行うことが何に繋がっているのかをイメージできるようにした。例えば、グループワークは、社会では1人で仕事をするのではなく、目標達成に向け人と協力すること、他者と協調する力が求められ、それがより良い成果に繋がっていく。従って、グループワークに積極的に関わることで自分の力になっていく。前期の授業では前述した①～③の基礎力をつけるため、表1のようにプロジェクトと講座を行った。

プロジェクトを行う上で、目標管理⁽⁴⁾を活用し、目標・戦略・戦術の設定、スケジュール管理、情報共有、ディスカッションを取り入れ、チーム全員によるプレゼンテーションを5回以上繰り返し行い、学生全員によるフィードバックを行い、上手くできている所は褒め、今後の課題は丁寧に伝えた。

本コースにとって、特に下記は奏功した点であると考え。

① PDCA：プロジェクト後は、個人、チームでの振り返りを行いPDCAの思考を習慣化した。

②情報共有：教員と学生間の共有フォルダを作成し、学生が作成した成果物、企業情報、連絡事項など全員が共有できるようにした。

これにより、学生の作成したパワーポイント（以下、PPT）などもお互いに見ることができ、より高め合う結果となった。また、企業からの連絡事項もすべて入れることで即情報が共有できた。学生は情報を自分から取りに行くことも習慣化できるようになってきた。

③学生の課題とするところを、サポートするため授業外の相談時間を出来るだけ確保した。それにより、教員と学生の信頼関係が増

した。

最終的に1年後期の企業実習がスタートする時点で2.で示した基礎的な力①～③をつけ、学生の成長する姿が確認でき到達姿（図4）達成への期待が膨らんだ。

1年後期の企業実習がスタートする時点の学生の到達姿

基本的態度 あり方	<ul style="list-style-type: none"> ● 時間管理、自己管理ができる ● 挨拶、受答えの徹底 ● マナー（態度、言葉遣い、他者を尊重）、報道相が徹底している ● 他者のために汗をかけるホスピタリティ精神 ● 自分の心に問い、ダメなものはダメと制御できる倫理観
必要とされる 力	<ul style="list-style-type: none"> ● 他者と協力、協調性の体制がとれる ● 企業実習において設定した目標に対して、達成するための行動がとれる ● 自分の考えを言語化でき、他者と共有できる ● 失敗を学びと捉え、それを活かして次に繋げるPDCAの習慣ができていく ● 指示待ちでなく自ら積極的に行動できる ● PC（ワード、エクセル、パワーポイント）の基本操作ができる

図4. 1年後期の学生の到達姿

3. 提携企業との連携

1年後期から実習が始まったが、コロナ禍にも関わらず、提携企業8社に実習を受け入れて頂くことができたのは非常に有難いことであった。提携企業および実習の流れは図5の通りである。

9月実施の全員によるビジネス研修を受講後、学生は、10月～12月に1か月1社（週3日：実習、残り2日：学内で学修）の企業実習に行く。



図5. 企業実習の流れ

コーオプ教育は企業と大学が協働でプログラムを実施するため、企業との連携を深めることが大事と考え、学生の進捗状況、学修の度合いなどの報告・連絡を丁寧にいった。

時系列で企業への報告に関して下記に記載する。

6月：学生の日本学生支援機構（JASSO）登壇および教員の発表⁽⁵⁾

日本学生支援機構学生生活部学生支援企画課キャリア教育室主催の「令和3年度全国キャリア教育・就職ガイダンス」に本コースの学生が短大として初登壇し、さらに担当教員による本コースの発表を行った。これに関して企業に事前連絡し、数社のご担当の方々にご視聴頂いた。

6月中旬～7月：企業研究の報告

表1で記載したように、学生が行った提携企業の研究PPTを企業に送付し、企業説明に来て頂く前に、学生の事前準備を報告する。

7月：学生の活動報告

本学の学生の主だった活動なども連絡し、成長度合いを把握して頂けるようにした。

8月：受け入れ人数確認など

企業の学生受け入れ人数を確認（3か月分）し、学生の実習先希望とのマッチングを行う。実習に関する基本事項および確認書を企業に送付し、覚書に沿った基本事項の確認、実習日・時間、実習内容などの確認、実習フローチャート（図6）、ISノート（図7）の説明をお送りした。ISノートは学生が毎日の仕事内容、学び、所感を書き、担当の方からフィードバックをもらう。それが出席表となる。ISノートは、自宅で振り返りを行いながら記載することでPDCAを実践できるだけでなく、自分のポートフォリオとして達成感にも繋がり、卒業後に見返しても頑張った自分からモチベーションを得ることが出来る。

9月：zoom（ビデオ会議アプリケーション）で実習前の打ち合わせ

実習直前に各企業とzoomによる最終打ち合わせを行い、企業の疑問・確認にお答えしたことでさらに共通認識に繋がった。

10月：実習スタート

1社目の企業実習がスタートした。

1週間を無事終えた時点で、企業にお礼のメールとゼミでの学生の振り返りを送信。

また、2週目から3週目にかけて、各企業・店舗に足を運び、学生の実習姿をモニタリングするとともに、担当者の方に実習の経過をお伺いする。1か月の実習が終わった時点で、対面及びzoomで、実習プログラムの課題および今後の学生に期待することなど伺う。

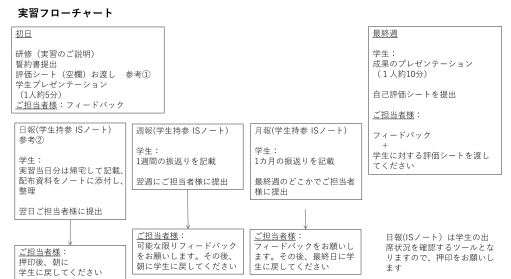


図6. 実習フローチャート

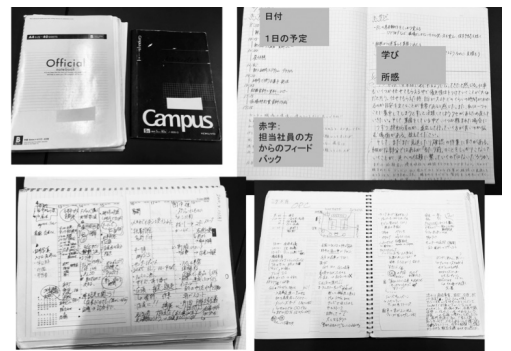


図7. ISノート例

東田が京都産業大学で行ったコーオプ教育で実際に当時の学生が作成したノート

11月、12月も同様に、企業とコンタクトし、現場に行き、学生のモニタリングを行う。

4. 後期の企業実習、ゼミの報告

1年後期の企業実習および学内でのゼミに関しては、表2の通りである。

表2に記載のように、10月、11月の企業実習の最終週に学生は1か月の成果のプレゼンテーションを担当の方々向けに行った。その際の企業の方々のフィードバックは下記の

通りである。

- ・18歳の学生とは思えない程しっかりした態度、実習作業、発表である
- ・XXさんがいると任せられる

表2. 1年後期の企業実習及び学内でのゼミ

9月	10月、11月	10月、11月
マナー講座 ビジネス研修 事前学習	企業実習1社目、2社目 週3日 1ヶ月	学内での学修(ゼミ)
全員で	1社につき1人~複数	企業実習の報告(毎週)
<p>・客員准教授による2回目のマナー講座を開催。</p> <p>・近畿日本ツーリスト(株)による7日間のビジネス研修を実施。</p> <p>観光業界に関する知識を得るとともに、同社の支店長、副支店長、課長、社員の方々によるリアルなプログラムで仕事を体験。</p> <p>複数の仕事を並行して行う体験、女性社員からワークライフバランスの講義など。</p> <p>最後に、グループミッションの発表を行う。</p> <p>・事前学習：実習上の注意事項、必要事項共有、初日に企業で大なる目標設定のPPTの最終確認</p>	<p>企業での実習</p> <p>・初日に企業で実習にあたっての自分の目標をプレゼンテーション。実習中も常に目標を念頭に置くことで、挫けずモチベーションを維持できる。</p> <p>・企業で様々なプログラムを組んで頂いている。出来るだけ多岐に渡る仕事を体験させて頂いたり、仕事間の繋がりなども説明頂いている。</p> <p>・学生はISノートを書き(図7)、担当の方から押印・フィードバックを頂く(出席表となる)。</p> <p>・最終週に学生による成果発表</p> <p>・双方による学生の実習評価(図8)。</p>	<p>企業実習の報告・課題を全員で共有。</p> <p>最終週では成果のプレゼンテーションを行うため、PPT作成も行う。</p> <p>翌月の企業での目標設定のプレゼンテーションも作成。</p>
<p>全員でリアルな仕事経験ができたのは、10月からの企業実習に向けて自信となった。</p> <p>社員の方々からのミッションに、グループで協力しながら全力で取り組み、丁寧なフィードバックも頂けたことで、実習への覚悟が高まった。</p> <p>プレゼンテーションに関しては、著しい上達が見られる。</p>	<p>企業で実際の仕事をさせて頂き、社員の方々やお客様とも関わることができ、達成感となる。</p> <p>主体的に行動でき、マナーもできており、担当者から18歳とは思えないと褒めて頂くことができた。</p>	<p>自分達が翌月行く企業でもあるため、真剣に取り組んでいる。</p> <p>課題に関しては、全員で解決を考え、励まし合っていることもチームの一体感が高まっている。</p> <p>負荷の高い経験を共にすることで、当事者意識がより高まっている。</p>
<p>進捗報告、仕事における時間厳守などは課題であった。学生は自覚しているため企業実習でこの課題を修正できると期待できる。</p>	<p>コロナ禍でもあり、少しの体調不良の場合は休まざるを得ない。幸い陽性者は出なかったが、学生の体調管理は課題の1つである。</p>	<p>慣れてくると、同じ仕事を繰り返すことに倦怠感が現れる。仕事は同じことの繰り返しであり、それを「極める」=信頼に繋がること、目標を再確認することを授業で伝える。また、「教えて貰えない」=「指示待ちである」ことを伝え、業務の中で観察し、自分で学びとることが大事であることも伝え励ましを行う。</p>

- ・新風となってくれた
- ・教育のたまもので社会人として基本的な行動はしっかりしていると感心している
- ・礼儀正しく元気な学生で現場に活力を与えてくれた
- ・引き続き2年前期の実習も是非来てもらいたい
- ・挨拶、敬語などの基本的なマナーはしっかりできており信頼して接することができた。意欲的に取り組んで貰ったので助かる場面も多々あった。理解と協調性が特に高いと感じた
- ・課題に黙々と取り組む姿勢、年齢の違うスタッフとのコミュニケーション、謝辞励行など、こちらも学ぶ点が多かった

学生が最後に担当の方から頂いた評価は、高評価が多く、学生の自信にも繋がった。

学生の主な学びとしては、

- ・最初はお腹が痛くなるほど緊張の連続であったが、やり遂げたことで自信がついた
- ・お客様に目につかないバックヤードや裏方の仕事について理解し、それらをきちっとすることが表の仕事を支えている。全ての仕事がおお客様の満足度につながる事が理解できた
- ・事前準備、時間厳守が信頼につながる
- ・社員の皆様が責任を持って仕事に取り組んでおられる
- ・全ての仕事に意味があることが理解できた
- ・自分の得意、課題がみえてきた
- ・毎日が同じような作業のように見えるが、自分なりの工夫をしていると同じであると思えなくなった。お客様第一で、先読み行動ができるようになってきた
- ・掲げた目標達成のために工夫して取り組むことで達成できた
- ・報告・連絡・相談を徹底することの大事さを学んだ
- ・実習の受け入れに多大なご準備を頂いたことに感謝しかありません。常にコスト意識

を持ち行動した

- ・仕事の責任感が大事であると実感した
- 最終日には双方（企業と学生）による学生本人の実習評価も実施。学生は、図8の評価シートに1か月の自己評価を行い、担当の方に示した上で社員の目から見た評価を頂く。それによって、学生はさらに自己理解が進み、今後の実習や取り組みの課題解決につなげることができる。

参考① 企業実習評価表

①	マナー（言葉遣い、態度）	1	2	3	4	5
・	挨拶はできていたか	1	2	3	4	5
・	敬語はできていたか	1	2	3	4	5
・	発表を聞く態度は良かったか	1	2	3	4	5
②	周りをよく観察し、率先してスピードよく動く	1	2	3	4	5
・	意欲（目標を高く設定し、その達成のための積極的に行動する）	1	2	3	4	5
・	適応力（様々な環境に適応し、対応していく力）	1	2	3	4	5
・	共感力（人の考えや心算を受け入れ、理解しようとする態度）	1	2	3	4	5
・	協働性（自分の立場を持ち、他の専業主で行動しなが	1	2	3	4	5
・	互いに協力し問題解決しようとする力	1	2	3	4	5
・	自主性（自らアタマを働かし、自分の考えで行動しようとする力）	1	2	3	4	5
・	創造性（常に、新しいものや方法を生み出すこととする態度）	1	2	3	4	5
・	指導性（集団の中心になって、物事を推進しようとする姿勢）	1	2	3	4	5
③	プレゼンテーション	1	2	3	4	5
・	プレゼンテーションの組み立て方が良かった	1	2	3	4	5
・	グループとしてまとまりのあるプレゼンであった	1	2	3	4	5
・	聞き手の立場に立ってプレゼンをできていた	1	2	3	4	5
④	インテグレーション全体を通して	1	2	3	4	5
・	成長を感じられた	1	2	3	4	5
・	これからの学生生活に繋げていけるものであった	1	2	3	4	5

⑤ 良かった点・改善点など、何かコメントをお願いします。
 全体的には協働性の意識のよさに自分の意思を持ち、メンバーの意見も受け入れながら協力して問題解決ができたので高い評価をつけました。業務の75%インテグレーションも立案した。一方、創造性の評価を3としました。活動の過程においても自分自身の体験に基づく課題解決やワークシートなどに就くものの重要性に気付く事がある程度できましたが、新しい知識や情報に對して、以前に学んだことや体験したことと関連付けて考える習慣をこれからさらに身につけていって欲しいと思います。

図8. 学生の実習評価シート

5. 新型コロナウイルス対策

新型コロナウイルス対策として、企業実習にいく1か月前から毎日体調チェックシートに朝晩の体温記載、毎月実習直前にPCR検査を実施している。熱がある場合は実習を欠席することを徹底している。

6. コーオプ教育の成果の可視化

学生の成長は他者から見ても明らかであるが、実際の成長を可視化するためベネッセキャリア社の「GPS-Academic」アセスメント⁽⁶⁾を2回受検し比較した(図9)。

1回目：7月前期授業が終了時、2回目：11月2社目の実習後の下記の下記の3領域9項目(図10)を測定。

企業実習の3社終了時(12月末時点)の比較が望ましかったが、本紀要の発行に間に合わないため、2社目終了後の比較となった。結果として、姿勢態度総合スコア、レジリ

エンス、リーダーシップは短期間で大きく向上している。これらの力は、特に仕事現場で必要とされる粘り強さ、積極的に他者と協働

して遂行する力であり、事前学修をベースに実習において繰り返し同じ作業をする中で培われた忍耐力であったり、学生が社員の方々

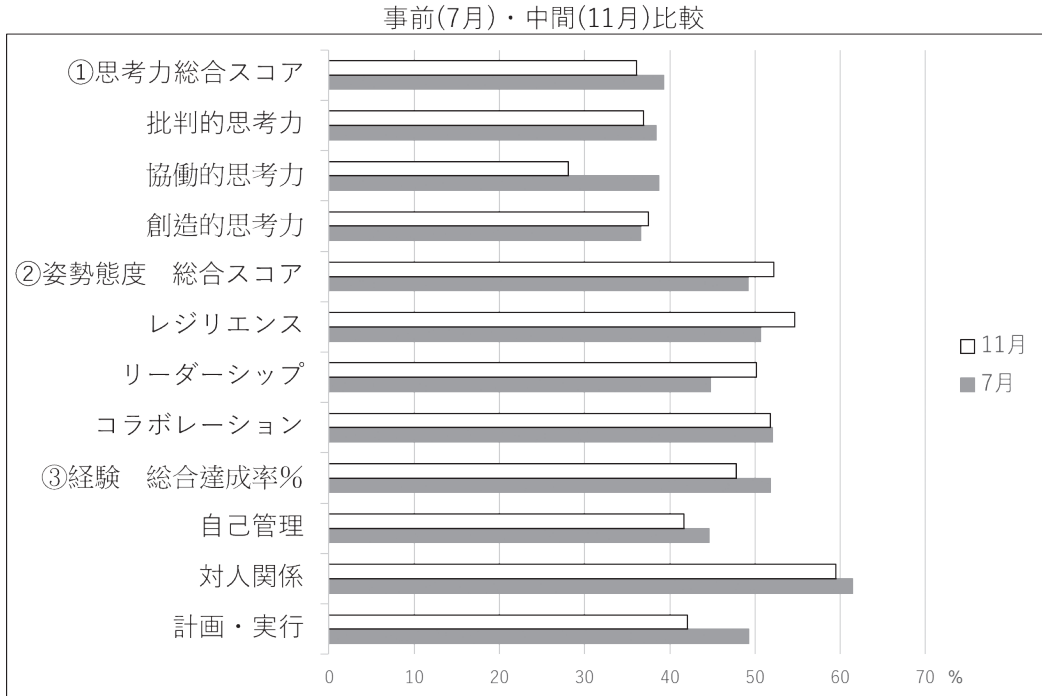


図9. 実習前と実習中の比較 (11月:n=11, 7月:n=12)

		GPS-A 測定項目		新・社会人基礎力	学力の3要素
問題解決力	思考力	批判的思考力	・情報を抽出し吟味する ・論理的に組み立てて表現する★	考え抜く力 (シンキング)	思考力 判断力 表現力
		協働的思考力	・他者との共通点・違いを理解する ・社会に参画し人と関わる★		
		創造的思考力	・情報を関連づける・類推する ・問題をみいだし解決策を生み出す★		
	姿勢・態度	レジリエンス	・感情の制御 ・立ち直りの速さ ・状況に応じ冷静に対応する	チームで働く力 (チームワーク)	主体性を持って 多様な人々と協働 して学ぶ態度
		リーダーシップ	・自ら先頭を立てて進める ・未知の物に挑戦する ・粘り強くやり抜く		
		コラボレーション	・相手の立場に立とうとする ・他者と関わろうとする積極性		
	経験	自己管理	・挑戦する経験 ・続ける経験 ・ストレスに対処する経験	前に踏み出す (アクション)	主体性を持って 多様な人々と協働 して学ぶ態度
		対人関係	・多様性を受容する経験 ・関係性を築く経験 ・議論する経験		
		計画・実行	・課題を設定する経験 ・解決策を立案する経験 ・実行・検証する経験		
学生意識	新入生用 or 在校生用	・大学教育への期待と評価 ・学習行動と今後の取り組み ・大学への適応 ・進路への意識と行動	何を学ぶか どのように学ぶか どう活躍するか	★記述あり版のみ	

図10. ベネッセiキャリア社のGPS-Academic 測定項目から許可を得て抜粋

を真似ながら積極的に行動したり、お客様と接していくことで培われたと推察する。一方で、その他の思考力、経験の項目は7月時点より低い数値となっている。これは、実習前の事前学修終了段階で教室内では「できている自分」がいたが、実際に社会に出ると社員の方々の仕事への取り組み方、思考などを目の当たりにし、自分の現状を知ったと推察される。

しかしながら、前回より下降したことは自己理解が進んだことであり、さらには、自分の現状を理解できた上で、2年前期の長期企業実習で1年後期の学びが活かされると期待できる。

7. 今後の流れ

1年後期で3社の実習を終えた学生は、2年前期で提携企業とのマッチングにより1社に絞り、週4日3か月の有給実習に行く。双方が納得すれば内定に繋がる可能性がある。

8. 課題

4月から主教員が本学学長の手厚いサポートを得ながら、ほぼ1人で授業、学生サポート、企業とのコンタクト、主な事務作業を行ってきた。これは、学生が1学年で少人数であったから進めてこられたが、来年度には2学年となるため、コーオペ教育を円滑に進めていくにあたり、各役割を担う、フットワークの軽い熱意ある人員が不可欠となる。共に協力体制が組めるマンパワーが最大の課題である。

また、長期企業実習において、学生の覚悟、忍耐、モチベーションをいかに高めていくか、というサポートも課題となる。今回の実習では、途中辞退者も出ている。途中辞退者の傾向として、高校で休みがちであった、自己肯定感が低いといった要素が挙げられる。さらに一層の学生への個別で丁寧なサポートが必要となる。

9. 考察

事前学修において、目標設定し他者と協働しより良い成果を求めることができる力、自分の考えを言語化できる力、周囲を見て先読み行動できる力、倫理観を育成し、企業実習に覚悟を持って臨める土台を作ることが企業実習の成果に大きく関わってくる。特に、コーオペ教育では、教員と学生の密な関わりが非常に重要であり、教員は学修・企業実習を通して学生の到達姿を常に意識し、学生と密に関わり各人の特徴を理解し、奨励、丁寧なフィードバックをすることが重要である。1年前期でグループ活動、情報共有、振り返り、フィードバックを丁寧に行ったことが、学生の成長度合いや企業担当の方々からのフィードバックからも、各人に差は見られるが一定の土台を作ることができたと言える。

また、企業実習は学生にとって初めて社会と接する場であり、緊張しながら、1の図3のスパイラルモデルを積み重ね、守破離（観察し真似る→自分の工夫を入れ試行錯誤する→自分なりのやり方を会得する）を実践していった。高校卒業後わずか半年経過の学生であっても、企業ごとに目標を掲げ、それを意識しながら仕事に携わる姿は、学生の実習姿をモニタリングした際、真剣さ、環境に適応しようとする努力、仕事への熱意を感じ、まさしく新風となっているケースが多かったと感じる。担当の方々からも、良い刺激を貰ったとのコメントも頂き、若いエネルギーが組織を活性化することに役立つと感じる。実習中は、学生はISノートを書き、毎日の振り返り、担当の方によるフィードバックから課題発見、課題解決に向けた行動や自信に繋がりと、PDCAを実践できる。これはアルバイトや短期インターンシップでは経験することができない貴重な要素となる。様々な経験を積み、他者と関わり、複数の業界・企業で実習を行うことで、自分の興味を模索でき、あらゆる仕事何かに繋がっていると考え責任

感を持って携わる意欲が育成される。こういった学生が社会に出ていくことで組織の活性化となり企業に貢献できる。その中でも特に、学生の素直さ、当たり前のことが当たり前に行える（無遅刻無欠席、ルール厳守）ということは成長における大きな要因となる。

10. 謝辞

提携企業様には、コロナ禍にも関わらず、実習を受け入れ、プログラムのご準備を下さいましたこと、大変感謝申し上げます。学生が少しでもお役に立てることができていましたら幸いです。

また、新たにスタートしたこのコースのためにサポートして下さいました、東田学長、学科長・教員の皆様、事務局長ならびに事務局の皆様、キャリア支援課、広報の皆様、学園の経営陣には感謝申し上げます。

参考文献

- (1) 神殿織江・服部圭悟（2020）日本初の取り組みとなる短期大学におけるコーオペ教育、大阪夕陽丘学園短期大学紀要、63、pp91-96（2020）
- (2) アメリカ・ペンシルバニア州教育コーオペ運営ガイド Pennsylvania Department of Education Cooperative Education Guidelines for Administration
<https://www.education.pa.gov/Documents/K-12/Career%20and%20Technical%20Education/Teacher%20Resources/Cooperative%20Education/Cooperative%20Education%20Guidelines%20for%20Administration.pdf>
（最終閲覧日 2021.12.10）
- (3) 京都産業大学むすびわざコーオペプログラム
<https://www.u-presscenter.jp/item/6926.pdf>（最終閲覧日 2021.11.3）
- (4) 目標管理：ピーター・ドラッカー提唱の

MBO（目標による管理）

- (5) 日本学生支援機構（JASSO）主催令和3年度全国キャリア教育就職ガイダンス
4. パネルディスカッション
5. 「キャリア教育・就職支援の取組事例紹介」（最終閲覧日 2021.11.3）
- (6) ベネッセiキャリア社 GPS-Academic
https://www.benesse-i-career.co.jp/gps_academic/（最終閲覧日 2021.11.3）